

社会的ネットワーク論とエスニシティ

——個から展望する社会調査の再考——

糸 林 誉 史*

Social Network Analysis and Ethnicity:

Rethinking of Social Research From an Individual perspective

Yoshifumi Itobayashi

要 旨 本稿の主要な関心は、国民国家の枠組みにおいて、エスニシティに関して異質な個人が紡ぎ出す（取り結んでいる）社会関係としてのパーソナル・ネットワークの特徴や実態を明らかにすることであり、その実態が近代（グローバル化）とどのような関係をもっているかという点にある。今日の世界は、差異の増殖の発端をつくる契機が発生しやすいような条件が地球規模で展開し、また人々の生活空間と活動領域はより広範囲なものとなり、それは他者との出会いを促進し、異質な他者との相互関係が格段に拡大している状況がある。この多様で複雑化した人間関係を把握するためには、従来の集団という「枠」を前提とした概念ではなく、そのような枠を超えた個人を把握することを可能とするパーソナル・ネットワークの分析が不可欠であると考ええる。以下本稿では、社会的ネットワーク論とエスニシティ論との接合という観点から、まずエスニシティ論と近代化について考察し、次に社会的ネットワーク論の下位ネットワークとしてのパーソナル・ネットワーク論の可能性を検討する。さらに、この両者の接合の外延として、フィッシャーの下位文化論と異質性の問題を考察する。

1 は じ め に

今世紀初頭の欧米を舞台に、「未開」ないし「伝統」社会の研究から出発した人類学は、未開/伝統社会を文明社会と同等の、しかし独自の人間社会であるとしてその研究の対象とし、また独自の社会認識への努力によって、自らの属する社会の相対化が可能になり、自己批判を通じて対象とする社会や文化をより深く理解することができるという認識論的前提から多くの調査研究がなされてきた。

第一次大戦後に近代人類学が成立すると、そのまなざしは人格を持った一人一人の人間ではなく、それに外在する社会構造へと向かった。

デュルケームの社会学主義の影響を受けたラドクリフ＝ブラウンは、制度化された諸関係における人々の配置に着目し、社会生活の形態の継続性を保証するものとして社会構造を見いだした。これは個々の人々のもつ特異性、個別性から目を背けて、法則性、一般性を示す社会関係の連続的網の目として概念化されたものであった。こうした個人の対象化を避けて社会を対象化しようとする方法は、構造機能主義の人類学の方法論として以後も発展していく。たとえばエバンス＝プリチャードは、個人の存在をさらに希薄化させて高度の一貫性と恒常性を有する構造的集団間の関係のみを対象として社会構造を捉えた。

だが、第二次世界大戦後になると、こうした構造と体系への偏重は批判を浴びるようになる。フォーテスやファースらは、変化変動が捉

* 本学講師 文化人類学

えられない、個人の主体性が無視されているとする批判を踏まえて社会構造概念を修正し、個人の選択と決定を軸とする一回性的な行為の領域とする「社会組織」の概念によって個人の主体性をとり込もうと試みた。

さらに1960年代になると、グラックマンらのマンチェスター学派は、「構造と体系」論を正面から批判して個人の復権を提唱する。すなわち、われわれと同じ生身の人間として対象をみると、構造や体系がまったく異なってくることを強く主張した。彼らは中南部のアフリカの都市社会において、従来のクラン、リネージ、年齢組などによる社会関係の記述が困難であるばかりか、幻想であったことを明らかにした。各個人が明確な境界を持たない世界を、友人、知人、同郷人、親族、同僚と様々な状況のもとで異なる社会関係を取り結んでいく現実を状況分析およびネットワーク分析としてアトム化した個人へのアプローチを試みた。このアプローチの基礎となったのは個人的社会関係であった。社会構造が、構造的集団間の永続的で規範的な関係から導かれたのに対して、一人のインフォーマントが紡ぐ個人的社会関係を分析の出発点として個人への接近を試みた。

しかしながら、こうしたマンチェスター学派の主張は、人類学の方法論的革新にまではいたらず、都市人類学に特有の方法として位置づけられてしまう。ミッチェル、エプスタインといったマンチェスター学派の後継者たちも、ネットワーク論を伝統的社会規範から解放された都市出稼ぎ社会へのアプローチとして方法論の適応範囲を限定してしまったからである。

だが、1980年代から活発になった人類学的方法論への自省の動きのなかで、これまで人類学の研究の単位として、ほかのさまざまな社会単位ではなく、「民族」あるいは「エスニック集団」に特権的な地位を与え、それを地域的・言語的な均質集団として画一化することへの見直しが始まった。また現在、いわゆる未開/伝統社会は、世界の等質化（グローバル化）によって消滅しつつある。それは人類学の対象として

きたアルカイックな社会の人々の消滅をも意味し、人類学の批判的機能もなくなる、あるいは不要なものとなるといわれている¹⁾。

またポストモダン派の人類学者が指摘するように、フィールドワークという直に触れあうことを通じて対象の人々を理解することをめざす人類学的社会調査が、逆説的なことにまさにそうした理解を妨げてきたという事態がある。つまり、境界で囲まれた非近代のフィールドと、人類学者の社会の間に隔絶的な距離を前提とすることによって、フィールドワークは人類学から対象との同時代性を排除してきた。

今ここで、人類学的社会調査に求められているのは、同時代の社会と文化、すなわち近代内部の差異を研究対象として、またその差異を隔絶的な距離としてホームとフィールドに分割することなく、国民国家という近代社会に対抗して構成されるマイノリティあるいは近代内部の不平等な差異、さらに文化と権力の不平等な関係を主題化する、ホームとフィールドという二項対立を横断する「ホームワーク」である。個人が複合的なアイデンティティをもち、これらの中から状況に応じて、社会的行動の指針を選択している。ある状況では差異が強調され、別の状況では共通性が追求されとする、エスニック集団や親族集団、伝統的慣習に拘束された人間像を前提とした人類学ではなく、複合的なアイデンティティを自在に操る個人の可能性に着目した研究が求められている（松田 1995：186-204）。

具体的には、個別的なポジションあるいはロケーションに立ち、個別的な制約のうちにある人々の、想像力と実践が交錯するプロセスの一部となりつつ、それをトレースしつづけるような営み、すなわち社会編成と視点の個別性を焦点化することによって、ローカルな創造性と、地域からグローバルへの相互連結性に着目する個別的社会状況と乖離しない知識の構築を前提とした方法論的戦略を発展させることである。このような個からの展望なしには、人類学的社会調査は、自閉的自虐と私的体験の累積にすぎ

ないものとなるであろう。

本稿の主要な関心は、国民国家の枠組において、エスニシティに関して異質な個人が紡ぎ出す社会関係としてのパーソナル・ネットワークの特徴や実態を明らかにすることであり、その実態が近代（グローバル化）とどのような関係をもっているかという点にある。その場合、実際には全体ネットワークを前提とすることは困難であり、基本的に個人をネットワークの中心の据えるエゴセントリック・ネットワーク（egocentric network）を対象とした分析にならざるを得ない。その意味において、数理モデルとしての社会的ネットワーク分析の方法論を直接的に導入していくことよりも、これまでの人類学的研究において展開されてきた個人的社会関係に関する研究から得られた方法論を批判的に援用しながら問題の説明を試みることが重要であると考ええる。また、今日のエスニシティ論の混乱は、実在/主観および伝統/近代という二項対立の二極モデルに由来すると考える。以下本稿では、社会的ネットワーク論とエスニシティ論との接合という観点から、まずエスニシティ論と近代化について考察し、次に社会的ネットワーク論の下位ネットワークとしてのパーソナル・ネットワーク論の可能性を検討する。さらに、この両者の接合の外延として、フィッシャーの下位文化論と異質性の問題を考察する。

2 エスニシティ論と近代化論

(1) 社会的な単位の問題

エスニシティ論においては次のような二項対立の図式からこれまで議論が行われてきた。すなわち、社会的な分析単位を構成する概念、たとえば階級、ジェンダー、民族等はその単位がある種の客観的なものと同定する立場と、それを関係する主体の主観的な構成体として考える立場への理論的な分岐である。これは日本語の「民族」についても同様の現象が見られる。つまり、民族というものを何かの実体的な弁別特

性によって区分しようとする試みと、それに対する主観主義的な立場からの批判である。

「民族」ということばには、①ネーション、②エスニシティ、③エトニー、の3つの意味合いが含まれている。もともとネーションの翻訳語であった民族は、国民国家の内部のマイノリティとしてのエスニック集団やエスニシティを指したり、さらに国民国家以前のエトニーといった集合体の意味にも使われている、背景の異なる3つの意味を含む包括的な概念となっている。このような包括概念としての民族には、3つの概念を連続的に捉えられる利点もあるが、同時にそれらの質的な差異を見逃す危険もある。このうちのエスニシティは、1960年代後半から使われ始めた概念で、エスニック集団の特性やエスニック集団自体を指すことばとして使用される。このエスニック集団とは「国民国家の枠組のなかで、他の同種の集団との相互行為状況下でありながら、なお、固有の伝統文化と我々意識を共有している人々による集団（綾部1993：13）」と定義される。つまり、エスニシティの概念は国民国家の枠組みを前提としてはじめて意味を持つ概念である。

またエスニシティ論は近代化論への批判として展開されてきた。近代化論では国民国家の内部の民族境界は、しだいに消滅し、ネーションに同化してゆくと考えられてきた。たとえば移民国家であるシンガポールにおいて、どこからの移民であろうといずれは平等にシンガポール人という一つのネーションへと統合されていくと考えられた。これは国民国家の中に実際には民族境界が存在しているように見えても、それはまだ前近代的な意識の残存のためネーションへの同化が遅れているためであり、近代化の進展によっていずれそのような境界はなくなると考えられていたためである。

そうした近代化論に対してのエスニシティ論の批判は、次の3つの点からであった。まず第一に価値意識論から、近代化論では産業化と交通・通信機関の発達によって社会移動が活発になると、人々が持っている価値・規範が伝統的

なものから近代的なものへと変容する。人々は個別主義的な属性、特殊性、地域、伝統を行動原理とすることをやめ、機能主義、業績主義、合理主義のような普遍主義的な新しい価値観・規範にしたがって行為を行うようになるというものである。この考えはいわゆる同化主義と呼ばれる。だが、エスニシティ論では、そのような価値観・規範の変容は生じず、エスニシティに基づく個別主義的な価値観が残存するという。

第二に、近代化論によると、近代化の進行は社会的資源の分配原理をエスニシティに基づく基準から普遍的な基準へと変化させる。その結果、エスニック集団ごとの社会的格差は減少して、エスニック集団ごとの社会階層は解消し平等な社会が形成されるという。しかし、エスニシティ論では近代化が社会階層の解消をもたらすことを否定し、むしろエスニック集団間の社会的亀裂と社会階層の境界は一致しつづけると主張する。

第三に、近代化論では、価値・規範が普遍的性格へと変質し、資源分配がエスニック集団の分節化とは独立し、人々のエスニシティを根拠にした不平や不満などの歪みが蓄積されなくなり、エスニック集団による社会運動は消滅していくという。ところがエスニシティ論では、1970年代に生じた「エスニシティの再生」に見られるように、エスニック集団の社会運動は減少しないとする。

ここでは、まず前述の二項対立の図式からエスニシティ論の整理を試みる。エスニシティ論は、国民国家の中でエスニシティ的状況、つまりどうして民族境界が存続し、あるいは強化されるのかを説明するために生まれた。そのアプローチには、①原初的アプローチ、②動員論的アプローチの2つに分けられる。前者は、共通の利害によってではなく、血縁や近親感にもとづく「原初的紐帯」とも呼ぶべき非合理的な感情によって集団は分化しており、その分化は人間にとって根源的であるため国民国家においても残存するのである、というものである。後者

は、エスニシティは状況に応じて意識的に操作される道具であり、国民国家の枠内の政治的利益のために人々の力を動員する際の合理的な手段であるため、戦略的に維持され、強化されるのだとする。

前者に立つギアーツ (1987 [1963]) は、アジア・アフリカ諸国での部族主義や地域主義の台頭を、ネーションが原初的紐帯の受け皿になれないためとし、原初的アプローチの先駆とされている。この原初的紐帯とは、地縁や血縁、特定の宗教や言語や習慣の共有から生じる一体感で、その強さは状況によって異なるが、どの時代、社会にも普遍的なものであるとされる。ギアーツは、原初的紐帯による帰属意識をネーションの帰属意識に置き換えることは不可能であり、ゲマインシャフト的な原初的紐帯とゲゼルシャフト的なネーションの対立は、一方が拡大すれば他方が衰退するという単純なものではないと述べて、近代化による同化論を批判している (Geerts 1987 [1963])。

それに対して、動員論的アプローチでは、エスニック集団を利益集団として捉える。コーエン (1976 : 161) によると、エスニシティは、分離主義の結果ではなく、他の民族集団間の強い相互作用の結果であり、国民国家の枠内で新たに生じた社会的資源をめぐる闘争の結果であると見る。その過程において、民族集団が自らの力を動員する際に、集団の伝統が新たに強調されるために、一見、エスニシティは伝統への復帰や分離主義のように見えるが、実際には国民国家という状況下の利益集団の形成であるという。また血縁や宗教や慣習や言語などの民族的な表象は、利益をめぐる動員のために状況に応じて合理的に操作される道具にすぎないとする。

この2つのアプローチは、共に自由な個人が平等にネーションへ同化していくという近代化論の同化図式を批判し、民族境界が存続しつづけることを肯定する点で共通している。だが、原初的アプローチは、民族を客観的な属性によって規定される実体と捉える点で、エスニシテ

ィはエスニック集団と同義に用いられ、言語や宗教、慣習などの客観的に観察可能な属性を共有する集団とされた。一方の動員論的アプローチは、主観的意識によって規定される虚構として捉える点で、対立するものである。

実体論の立場からの原初的アプローチは、民族を弁別する単位を求めて、言語、宗教、そのほかの要素を選択して、この地域にはいくつの民族集団があるという議論を展開する。だが、この分類作業は、それを行えば行うほど基準が多岐にわたり、混乱を増していく。こうした基準の設定の恣意性についてはすでに多くの議論があり、その背景に歴史的・政治的な操作が作用しているということもくり返し指摘されてきた。

それに対して、民族の弁別の客観的な基準を放棄する立場の動員論的アプローチにおいては、エスニック・アイデンティティという一種の主観主義的な概念を導入した。これは、当事者が自らを定義するあり方によって、弁別の客観的な基準に代えるものである。だがこの立場においては、アイデンティティがいかに状況依存的であるかという指摘が繰り返される。この指摘は、社会的な対他関係の中でアイデンティティが存在するという、すでに構造的に内在するものである。

従ってここで重要なのは、主観的帰属意識と客観的属性のどちらが先かということよりも、その対応関係である。また民族の分節化が、自立的に関係を結ぶ一対一の対応ではなく、恣意的な対応であって、その対応による民族分節は柔軟性を持つこと。よって民族の分節化は、差異の連鎖として捉えることができ、境界の揺れ動くぼんやりとしたものにならざるをえないこと²⁾。その一方で民族は、衣装を着替えるように自由に選ぶことはできない、生活感覚に根ざしたリアルな存在であるということである。

(2) 近代化とエスニシティ再生論

1970年代以降、アメリカ社会では、エスニシティの再生 (resurgence of ethnicity) についての議論が高まった³⁾。近代化の進行する社会

で、なぜエスニシティを軸にした社会関係や社会的な集合が維持され、しかも積極的な意味を持つのか、というものである。1960年代までの同化論ないし融合論の古典的エスニシティ論においては近代化、産業化、都市化などの社会変動によるエスニシティの展開によって、属性主義に基づく文化的分業は消滅し、結果的にはエスニシティ別の階層構造の存在しない社会が出来上がるとしてきた。

それに対して、1980年代になるとエスニシティの客観主義的な定義から主観主義的な定義へと転換することになり、さらに複数の帰属意識が状況によって選択されるという議論が出てきている (Okamura 1981)。

ニールセンが「拡散-消滅モデル」(diffusion-erasure model) と呼ぶ、近代化が必然的にエスニックな諸特徴にもとづく人々の区別や関係性を消滅させるとの一般的通念は、先進産業地域におけるエスニシティの再生を説明できず、これに代わって、次の2つのモデルが注目されている。

第一に、「対抗的エスニシティ・モデル」(reactive ethnicity model) では、エスニシティの再生は、地域的不均衡発展と結びついた文化的な分業によって解釈される。第二に、「競争的エスニシティ・モデル」(competitive ethnicity model) では、近代化にともなう普遍主義的諸基準によって分化する諸個人が、資源獲得の競争のなかで勝利するためにエスニシティによる連帯を必要とすると解釈される (Nielsen 1985: 133-134)。

第一の対抗的エスニシティ・モデルには、「同化理論」と総称されるシカゴ学派 (Park and Burgess 1921; Park 1950; Gordon 1964; Greeley 1971)。および国内植民地論⁴⁾ (Hechter 1974, 1978), 分割労働市場論⁵⁾ (Bonacich 1976), 中間マイノリティ論⁶⁾ (Bonacich 1973) からなる。これらに共通するのは、民族的アイデンティティの重要性を差別や不平等と関連づける視点にある。また、居住地の隔離性、民族的階層性の減少および外婚

の増加によって構造的な同化が進展することで民族的紐帯の重要性が低下する、あるいは逆に阻害されることによって民族的自覚が高揚すると主張する。

第二の競争的エスニシティ・モデルでは、民族的マイノリティが高い学歴、知識、技能を身に付けていくほど、支配社会と社会的資源をめぐって競合が生じる。そしてその競合によって民族的アイデンティティが高揚するというものである。同化論が、抑圧状況こそエスニシティの統合を左右する要件であるとするのに対し、競争的エスニシティ・モデルは、一定の構造的な同化によってもたらされる競合状態をエスニシティ高揚の契機とする。また、源初的紐帯重視論がエスニシティの生得的な側面を重視するのに対して、競争的エスニシティ・モデルは同郷団体との接触などによる獲得的な部分を強調する (Hannan 1979 ; Nielsen 1980 ; Olzak 1982 ; Portes 1984)。

この両者に共通するのは、エスニシティの展開を一元的なものとして描く同化論の限界を指摘し、エスニック集団関係が縦横に交錯する多元的なものとして捉え直す点である。これまでのエスニシティ論において、民族という概念が、それが客観的な差異に基づくものなのか、それとも主観的なエスニック・アイデンティティに規定されるのかという理論的な分岐は、その解決を見ないままであった。実体論に立つ論者は、具体的な事例を論じる際に、しばしば民族の問題はある種の客観的な基準に基づくものという理解に引っ張られ、他方のアイデンティティを重視する論者は、それが文脈ごとに多様な意味を持つという周知の事実を指摘するだけで、なぜ近代化の個々の文脈において特定の差異が他の差異よりも強調されるのかといった点を分析する視点を持たなかった。だがここで重要なのは、実体論と状況論のどちらが正しいかではなく、どのような状況の下で、「民族」という社会的な単位が実体化されるのかを、個別の事例ごとに検討し、それを分析していく枠組みである。

3 社会的ネットワーク論の可能性

(1) 個人の復権

ここでネットワーク概念が登場してきた背景について確認してみる。まず社会についての全体的な構成を考えると、一方には個人があり、他方には諸個人の行為を集散的に規制し、枠づける側面としての社会経済システムがある。社会経済システムには、具体的には国家の法制度や資本主義の市場システムなどの諸制度が含まれる。それは標準化・類型化された一般的なルールにもとづいて諸個人を規制する。そこでの個人はひとりの人間として全体的な存在というよりは、法的・経済的側面から抽象化されたアクターとして設定される。これに対して両者の中間に位置づけられるのが、集団や階層、民族、都市といった狭い意味での社会構造に対応した側面である。そこでは、人々は多かれ少なかれ、様々な地位と役割のセットに関与する具体的な人間として扱われてきた。

このように社会の3つの側面を分けて考えると、それぞれの社会的な文脈により各側面の様態は様々なものとなる。たとえば、伝統的な社会においては社会構造が優越し、近代社会においては社会経済システムの優越が顕著であると。さらにグローバルな共通基盤が世界を覆いつつある。このシステムの問題が有効性を持つてくるのは、近代における社会の分化と官僚制化によって、社会構造というよりも、もっと機械的に編成・機構化された秩序の現れ以降のことである。つまり、集団や階層を単位とした社会構造を中心とした統合から、資本主義の市場システムや官僚システムにもとづく統合の形態へと変動していく過程において、システムの問題が着目されてきた。

一方のネットワーク概念は、システムの問題が社会構造から社会経済システムが自立化していくのと同様に、集団や階層を軸とした社会構造が不透明になっていったことと関連している。従来のように個人が集団や階層の一員とし

て行動するというより、社会経済システムからの直接の制約を受けつつ、個人として振る舞う場面が多くなるとともに、本来の意味での社会構造の概念的な有効性が失われていった。集団や階層による諸個人の位置づけより、諸個人が他の要素と結び結ぶ社会関係の総体、つまりネットワーク概念というかたちで、構造論的アプローチでは説明できない都市的状况を説き明かす新たな視点として現れてきた。したがって今日の研究の課題も、集団パースペクティブからネットワーク・パースペクティブへと転換してきたといえる。

このような背景から着目されてきたネットワークという概念には、①説明概念としての意味合い、②構造概念としての意味合い、③機能概念としての意味合いの3つが含まれている。これまでも構造概念としてのネットワークについては、古くから研究が行われてきた。たとえば社会関係という概念において、個人間の人間関係を社会組織の構成単位として重要視してきた。だがネットワークという概念が自覚的に使用され始めたのは比較的新しいことといえる。

(2) 社会関係からネットワークへ

社会的ネットワークという概念が最初に使われるようになったのは、1950年代半ばからのイギリスの社会人類学におけるアフリカ都市研究においてである。それ以前の人類学においても、たとえばラドクリフ＝ブラウンが、社会構造を「現実存在している社会関係のネットワーク」と定義したように、言葉としてのネットワークの使用があったが、それは単に比喩的な意味での使用にとどまった。1950年代のイギリスのマンチェスター大学におけるグラックマンのセミナーに参加した研究者の中から、社会的ネットワーク研究が生まれた。その後、2つの方向で反構造機能主義的なパラダイムが展開されていく。

第一の潮流として、バーンズ、ミッチェル、エプシュタイン、ボワセペンらの伝統社会の非団体組織を対象にした社会人類学者の研究がある⁷⁾。バーンズは、ノルウェーの漁村の階級構

造を研究するうちに、それまで人類学において支配的であった構造機能分析の有効性に疑問を持ち、居住地域や職業を基盤とする従来の集団概念では捉えきれない社会関係の秩序をネットワーク概念によって説明しようとした。従来の構造機能主義的な視点では、社会は永続的な集団システムとみなされ、この集団は地位と役割によって構成され、一組の価値によって支持され、システムの均衡を維持するものであるとされた。この場合の個人は、システムを支持する支配的な価値基準に従って行為する道徳的存在とすることが前提とされる一方で、社会関係における個人の選択性はまったく無視されてきた。彼は都市化とともに伝統的な社会が解体し、人々が既存の弱体化した集団から離脱しつつある状況を踏まえて、人々の集団所属よりも人々のネットワーク形成に注目したのである。人々がどのようなネットワーク形態をとるかによって、伝統社会からの離脱と都市的生活様式の獲得において異なった適応を示すとした。(Barnes 1954 : 39-58)。

次の第二の潮流として、ボットをはじめとするウドリー、オールダス、シュトラウス、ネルソン、ターナーらの家族社会学の領域における研究がある(Oakley 1980 [1974])。ボットは、夫婦の役割関係と、夫婦それぞれが有する友人・近隣・親族などのネットワークとを関連づけて家族研究に衝撃を与えた。夫婦の役割関係を分離型と合同型にわけ、これをネットワークの2つのタイプ、すなわち緊密ネットワークと弛緩ネットワークが夫婦役割の2類型と対応するという仮説を提示した(Bott 1957)。これはその後、ボットの仮説の検証とサポーティブ・ネットワーク研究の蓄積へと繋がっていったが、ネットワーク概念の展開が夫婦の役割関係だけに限定されてしまったという側面が問題となる。

このボットからサポーティブ・ネットワーク研究へと連なる系譜は、親族、特に親戚関係を実証的に把握し、親族組織の機能を明らかにしようとする親族ネットワーク論の流れを見せた

(姫岡 1971: 165-207)。1950年代のアメリカにおいて、ミシガン大学を中心とするブラッド、アクセルロッド、シャープらの都市における家族の研究やサスマンのクリーブランド研究など、多数の親戚関係を対象とした調査が実施された (Blood 1956)。またイギリスにおいても、ファースの産業社会における家族と親族についてのロンドン調査、タウンゼントの老人調査、ヤング、ウィルモットの調査などが同様に実施されている (Firth 1971 [1964]: 83-104)。

このような社会的ネットワークの研究が、1960年代から1970年代前半にかけて数多く展開された背景としては、次の2つがある。第一に、パーソンズの核家族の孤立論や拡大家族の消滅論への反証として、修正拡大家族論のよる研究が展開されたこと。第二に、シカゴ学派、特にワースのアーバンイズム論の検討のため、すなわち都市化によって非人格的な第二次関係が全人格的な第一次関係にとって代わることへの反証としての実態調査が展開されたことによる。

1930年代にアーバンイズム論を唱えたワース (1938 [1965]: 129) は、都市・産業社会と村落・民俗社会をコミュニティの2つの理念型として対極的に設定した。これをモラルの観点から定式化したのが、グリック (1989: 9) の道徳主義的二極モデルであった。このような二極モデルは、たんに2つの理念型を並置しただけではなく、それは村落社会から都市社会への移行を必然とする近代観を前提としていた。それを普遍の浸透と捉えるか、社会の解体と捉えるかの違いはあれ、二極モデルは世界の現実をもっとも表現していると見なされてきた。

しかし1960年代以降、この二極モデルは平板な近代化論として批判の対象となった。都市化にともなって親族や宗教、地縁紐帯に基づく組織は解体するどころか、より活性化していくという報告が相次いでなされ、こうした伝統的紐帯の存続は、第三世界に限らず先進国と呼ばれる産業社会においても顕著に見られた。さらに

コーエンが「再部族化」と呼んだように、伝統社会から近代社会への移行は不可逆的な過程ではなく可逆的であり、都市住民は状況によって伝統原理と近代原理を自在に選択し、操作していることが指摘された。

だが今や二極モデルの批判者自身が批判の対象となっている。こうした二極モデルに対して、普遍主義、近代主義のレッテルを貼りながら、同時に二極モデルを生み出す場の歴史的な構造やメタ構造、すなわち同化を推進する巧妙な支配装置を迫及する視点を隠蔽してきたことが批判されている (Magbane 1971: 419-445)。それは二極モデルがどのような場の構造において生成されているのかが問われなければならないという批判である。

ここで再考されるべきは、接触され浸透される受動的な存在であった「個」の視点へと転換して、その能動性に着目することである。だがこの能動性は、かつて論じられたようなネットワークの自由自在の能動性ではなく、松田 (1996: 184) が指摘するように日常生活の文脈における微細な可能性のことである。

4 パーソナル・ネットワークと下位文化論

(1) パーソナル・ネットワーク論

ここでは、まず社会的ネットワーク論におけるパーソナル・ネットワークについて概観し、次に都市社会学におけるパーソナル・ネットワーク研究として、フィッシャーを取り上げ、その下位文化論が想定する個人と異質性の問題に関して考えてみたい。

パーソナル・ネットワーク論は、社会的ネットワーク論の下位理論であるとされる。社会的ネットワークは、広義には、集団間関係、機関間関係、制度間関係、集団と機関、機関と人、人と人との社会関係を対象とする。パーソナル・ネットワーク論は、その射程を人と人との関係に限定し、その特質を明らかにするものである。ウェルマン (1990: 195) は、パーソナル

・ネットワークを「個人が、親戚と同様に、友人や近所の人、職場仲間等と、親しくまた活発に付き合っている紐帯のすべて」として定義している。また従来のように人間関係を「親族関係」、「近隣関係」、「職場関係」、「友人関係」と個別に分析するのではなく、それらの相互関係も含め、総合的に分析していこうとする点にその特徴がある。

1970年代から1980年代にかけて、都市社会学の領域においてネットワーク研究が盛んに行われるようになった。その契機となったのは、家族社会学の場合と同様にシカゴ学派の都市理論の再評価であった。だが、都市社会学において家族研究と大きく異なる点は、核家族ではなく、個人を分析の単位とし、個人の取り結ぶ人間関係をパーソナル・ネットワークとして位置づけたことにある。その代表的なものとして、フィッシャーの北カリフォルニア・コミュニティ研究、ウェルマンのトロント・イーストヨーク研究、ローマンらのデトロイト研究、ウィルモットを中心とするロンドン研究、グリーンバームらのカンサスシティ研究等がある。1985年には全米を対象としたGSS (General Social Survey) 調査が実施された (Wellman 1988: 87-88)。

パーソナル・ネットワークは、諸集団の外に広がる関係や、関係としてのみ把握しうる集団とはなりえない関係を重視する。このため、世帯や同居の家族の外に広がる関係、すなわち親族、近隣、同僚ないし職場や仕事関係、友人の4つのタイプに大別できる関係を対象とする。親族については、別居の親、子、きょうだい、それ以外の親戚などに分類して、親しくつきあっている者の数や居住地、接触頻度を問う場合が多い。近隣については、親しく付きあっている者の数のみを問う場合、また詳しく付きあいの程度を問う場合もある。同僚ないし職場や仕事関係のネットワークについても同様である。友人ネットワークについては、特に重視される。これは関係ないしネットワークとしか表現のしようのない繋がりを典型的に表現している

ためであり、また個人の選択や選好、ネットワークの形成と維持のための積極的な営為が最もよく現れる。具体的には、親しい友人数と居住地を問う、さらに相互作用の内容を問う。たとえば親しい友人を3人ないし5人程度を対象にして、彼らの諸属性 (性、年齢、居住地、出身地、学歴、職業的地位など) を問う、また友人となったきっかけやソーシャル・サポートを問う。その上で、友人たち自身の相互関係を明らかにする。

このようにして収集された関係データから、パーソナル・ネットワークの範囲、親族・近隣・同僚・友人という4種類のネットワークの数における偏り、各ネットワーク内の相互作用やサポート関係からみた偏り、あるいはネットワーク別の機能分担のあり方、ネットワークの空間的な分散状況を把握しようとする。その上で、ネットワークの同質性-異質性の程度、密度を明らかにする。

このようなパーソナル・ネットワーク論の展開によって明らかになった研究上の視点は次の3つである。

第一に、集団よりも個人の関係ないしネットワークを重視する点である。従来、人々の行動や態度は帰属する様々な集団の規範に影響され拘束されていると考えられてきた。家族あるいは世帯、親族集団である氏族、同族、組や講、そして村落など、累積する諸集団に人々は所属し、その規範に拘束されているという理解は、集団のなかの個人という見方として重視されてきた。だが親族集団や近隣集団の解体の中で、人々は親族集団ではなく、親族関係の中に生きようになっている。また近隣の集団の中ではなく、地域の友人関係の中で生きようになった。このように人々の行動と意識は、所属集団との関連では的確に説明することができず、人々の紡ぐネットワークの中でのみ説明が可能だという見方が生まれてきた。

第二は、地位-役割モデルよりもネットワークのタイプによる説明が有効となった点である。集団のなかで人々が占有する地位とそれに

もとづく役割、あるいは地位群と役割群の組みあわせによって人々の行為を理解するアプローチは、構造機能分析の中で中心的位置を占めてきた。しかし人々の所属集団自体があいまいになり、かつ役割概念の中核に位置づけられる役割期待も、その背後にある諸規範の揺らぎとともに説明力を低下させている。さらに人々が集団の中には十分に所属しなくなっており、したがって集団内の地位とそれに相応する役割によっては人々の行動が規制されなくなったことが重要である。ネットワークの視点からは、地位の概念の揺らぎが生じ、それに応じて役割概念はさらなる疑問が想起される。

第三は、個人の選択性を重視し、個人が積極的にネットワークを形成する側面を重視する点である。確かに諸個人は既成の社会、集団、制度、組織、規範に規定され拘束される存在である、だが同時に自ら紡ぎ出すネットワークを媒介として既成の社会を流動化し変動させている社会形成の主体でもある。諸個人が選択的にネットワークを形成し、さらにネットワークの質自体も他者との相互作用の中で作りあげていく過程こそ、社会形成の営みとして重要視されよう。パーソナル・ネットワーク論は、むしろこうした視点から絶えざる変動過程の中から生じてくる新しい社会形成の動向、新しい文化形成の動向に着目するものである。

このようにパーソナル・ネットワーク論が切り開く視点は、従来のような客観的な外的基準によって演繹的にとらえられるものではなく、現実人々を取り結ぶ諸関係の総体から帰納的に推定されるものであるという認識が根底にある。

(2) 下位文化論と異質性

フィッシャーの下位文化論 (subcultural theory) の特徴は、社会的ネットワーク研究の同質結合傾向の議論とアーバンズム論が接合しているところにある。その論点は、「都市化がネットワークの同質性を高める」というものであった。すなわち、都市の人口規模が高まれば、個人の選択の余地や範囲が広がるとともに制約

は減少し、社会的ネットワークにおいて同質結合傾向 (homophily) が促進されることで、ネットワークの同質性が高まるというものである。

ここでいう下位文化とは、様式的な信念や価値や規範のセットであり、それはより大きな社会システムや文化のなかにあって、相対的に区別されうる人と人のネットワークや諸制度のセットとしての社会的下位体系と結び付いているものであり、具体的には、次の5つのような集合体であるとされる。①共通する明確な特徴 (国籍、宗教、職業、ライフステージ、趣味、障害、性的志向、イデオロギー等) を共有している人々。②そうした特徴を共有している他者と仲間になる傾向のある人々。③社会の一般的価値や規範とは異なる考えを信奉する人々。④ある特徴に関連する諸制度 (クラブ、機関誌、専門店等) をひいきにする人々。⑤共通する生活様式を持っている人々の5つである。つまり、下位文化は、同質結合傾向を基盤に形成された個人間のネットワークおよび諸制度のセットとして位置づけられている (Fischer 1983 [1975]: 57)。

フィッシャーは、1977～78年に、ワースのアーバンズム論および下位文化論の検証という視点から、北カリフォルニアの50のコミュニティの英語を話す18歳以上の住民1,050名に対して質問紙による面接調査を実施した。調査内容は、10の質問項目を提示し、それに該当する人々を挙げてもらい、その人々の属性を分類していくという方法であった⁸⁾。

10の質問項目は、以下のようなものである。

- ①数日、家を留守にする場合、誰にあとを見てもらうか。
- ②仕事上の問題を誰に相談するか。
- ③この3ヶ月間、家庭内の仕事を手伝ってくれたのは誰か。
- ④最近、誰と社会的活動をしたか。
- ⑤共通の趣味や関心で話し合うのは誰か。
- ⑥デートの相手は誰か。
- ⑦個人的な悩みを相談するのは誰か。
- ⑧重大な決定を下すとき、誰に相談するか。
- ⑨大きなお金を借りるとき、誰から借りるか。
- ⑩15年以上、同居しているのは誰か。

か。

また人物の社会的背景 (social contexts) は、①近い親戚、②遠い親戚、③職場の人、④近所の人、⑤同じ組織の人、⑥友人、⑦その他、である。この方法によって、住民がどのくらいの人々と交渉を持っているかというネットワーク規模とその種類別の構成を明らかにしようというものであった。

結果として、19,417人のネットワーク・メンバーが抽出され、平均18.5人の名前が挙げられた。また構成は、近い親戚、友人、遠い親戚、職場の人、近所の人、同じ組織、その他の順であった (Fischer 1982: 17-42)。

彼は、都市化は、都市の民族的マイノリティの文化やネットワークを含めて、都市的下位文化やネットワークの強度を増大させると述べたが、これはワースの議論への批判として展開された。ワースのアーバニズム論は、人口規模、密度、異質性から操作的に定義された生態学的「都市」を独立変数とし、都市社会内の社会関係、人々の社会的性格、態度など諸特性の複合としての「都市的生活様式」に従属変数とするものである (Wirth 1965 [1938]: 12-24)。

それに対して、フィッシャーは、信念や行動のどれをとっても都市と農村の相違は経験的にも確かな事実であり、そうした差異が歴史や文化の違いを超えて広範に存在すること自体が、個々人の諸特性だけに還元されない何かであり、生態学的要因 (人口規模) はなお有効であるとする (Fischer 1983 [1975]: 54)。その上で、次の2つのアーバニズム論への修正を試みた。第一に、都市化・アーバニズムの進展は、単に逸脱や社会の解体をもたらすばかりでなく、創造的・革新的行動といったプラスの側面ももたらすものであることを「非通念性」(unconventionality) という概念によって提示した。この非通念性とは、規範から外れた行動様式、創造的行為、犯罪、離婚、非合法活動、社会変革を目指す暴動などを含む概念と説明されている。この都市のポジティブな評価は、都市をアノミーの文脈で捉えたワース理論の修正

となっている。第二に、都市の定義について、都市的なものは人口規模の要因からのみ定義されるとして、大都市には通念にとらわれない下位文化の活力を維持できる臨界量があると指摘し、ワースの都市の定義から異質性を排除した。

彼は異質性を排除する理由として、①異質性の定義がきわめて曖昧であり、民族、階級、文化、職業等、どんな型の異質性が重要なのか明確でない。②異質性の要素自体が、規模や密度に比べて説明力が低い。③セグリゲーションが進み民族・階層別の住み分けの明確化したアメリカの都市の現実では、異質性の要素が欠けていることの3点を指摘した (Fischer 1972: 192)。特に注目されるのは3番目の理由で、同一民族や人種および階層が同質的な近隣を形成し、それらがモザイク模様となっているアメリカの都市のセグリゲーションの現実であった。このためコミュニティの人口の同質性は非常に高いものとなった。

以上のようなフィッシャーの下位文化論への反証は、デンとボナッチによって提起されている。彼らは、フィッシャーの北カリフォルニア調査では、黒人の居住者が全体の40%を超えるコミュニティおよび英語を話さない住民を意識的に対象から除外しており、階層的に同質なコミュニティを強調し、また人種についての実証がなされていないと批判する。デンとボナッチは、独自の GSS 調査結果の分析から「黒人ネットワークの黒人度は、アーバニズムによって強化されない」ということ、すなわち黒人が多数派を占めるコミュニティにおいては、ネットワークの同質性は高くないということを明らかにした。

さらにアーバニズムは、おそらく各都市の様々な民族集団ごとに異なった影響を与えているとして、フィッシャーの下位文化論の問題点を示した。その差異は各々の民族集団の移動の歴史的パターンに起因するものであり、はじめに大都市に移住し、後に郊外に移動した白人やアジア系の民族集団と、それに対して、農村から

都市に移動してきた黒人やメキシカンのような民族集団とはアーバニズムの影響も異なっていると主張する。このことはネットワーク調査の際には、単純に同質結合傾向をネットワークの全てに適用できないだけでなく、ネットワークのそれぞれの属性や人種・民族・国籍等のグループ別の詳細な検討が必要となることを示唆している (Deng and Bonacich 1991 : 35-50)。

このことは、出身地の異なるものとの接触を持っている人が、通念にとらわれない意識を有する比率が高いこと。すなわち、非親戚ネットワークにおける異質な人間との「まざりあった紐帯」(mixed tie)を取り結んでいる人のほうが、脱通念的、開放的、コスモポリタンの傾向を持つことを指摘している。

フィッシャーの下位文化理論は、地域が都市的になればなるほど、個人の選択性の増大と選択的移住が進み、同質なネットワークを基盤として、下位文化の多様性が増大する。そして多様な下位文化の集団間摩擦 (intergroup friction) の中から都市的特徴である非通念度が増大する、というものであった。その上で、ワースの規模、密度、異質性の3つの側面からの都市の操作的定義を、人口規模を重視し、異質性を排除するかたちで修正を行った。たしかに、ワースの議論は、規模の影響、密度の影響、異質性の影響の相互の関連性を曖昧なままにしたままで、議論の混乱を生んだが、フィッシャー理論が都市の定義から人口の異質性という要素を排除したことによって、個人の異質結合の重要性が軽視されてしまっている。

ネットワークの同質性-異質性という問題は、表裏一体の関係にあり、個人の多様な個人的紐帯や属性は、ある側面では同質なネットワークを取り結び、別の側面では異質なネットワークとなる。たとえば、ボランティア・アソシエーションの形成では、同じ趣味の友人という視点からは同質的ネットワークと捉えられるが、その人々の水平的分化、すなわち社会的地位や年齢、民族といった側面に着目した場合は、異質的ネットワークと捉えることも可能となる。し

かも、個人的紐帯や属性が無限に存在することは、個人間の紐帯の内容が多次的構造を持つことを意味し、ネットワークの同質-異質の問題も多次元に存在するということになる。

5 個から展望する社会調査に向けて

(1) 差異と文脈

従来の文化人類学が研究の対象としてきた民族が静態的で固定されたものであるのに対して、エスニシティ研究は、動態的で可変的なエスニシティを対象にするという論じ方がなされてきた。しかし、人類学者の研究してきた国民国家以前のエトニーが明確な境界をもつ孤立した集団のように表現されたのは、彼らの持つ概念体系のためであり、むしろ実際には国民国家の枠組の中のエスニック集団のほうが、はるかに明確な境界によって固定化されている。今日言われているように植民地化によって固定される前の民族は、境界も同定されずに重複や帰属変更や越境を許容するような柔軟な可変性を持っていたのである。松田 (1992 : 26-28) は、このような国家に抗する柔軟な分節原理による民族の分節を「ソフトな民族」とし、国民国家の枠組の中のネーションやエスニック集団を「ハードな民族」として区別する。このソフトな民族としての分節原理は可能性としてはどこにでも見られるものであるが、近代の国民国家の持つハードな分節原理は、その枠内のソフトな民族の分節原理を変質させ、エスニシティのようなハードな民族分節を生み出した。

「ハードな民族」にとって、その境界が民族集団間の相互行為的状況によって消滅するという可変性や、あるいは一つの集団の中により下位のレベルの諸集団の境界を内包するという重層性があるにしても、一つのレベルにおける同種の集団との間の境界は、その都度明確に区切られた集合全体というものを想定しており、その可変性は柔軟な弾性というより、フィッシャーの下位文化論で論じられた集団間摩擦による葛藤をともなうハードなものとなる。

では民族が実体化されるとはどういうことであろうか。福島(1998:294)は、民族という差異とは関係性(ネットワーク)の別の側面であり、アイデンティティとはその差異の知覚によって事後的に自覚されるものであるという。ある特性の記述では同じ範疇に属する人々も、その範疇の中で更に細かい差異に分割することができる。たとえば、男・女、出身地、宗教、言語、年齢、収入、学歴、身体的特徴、服装、食事など差異を記述する弁別特性は無限に存在する。ここでのエスニック・アイデンティティとは、こうした差異をその文脈において活用する、その活用のしかたに他ならないとする。

だがその一方で無数に存在する差異のうち、特定のものが選択されて増殖し、その差異が別の差異へと転化され、他の様々な差異を圧倒化していく仕組みには、ハイパーサイクルとも呼ぶべき円環的な過程が存在すると指摘する(福島 1998:303)。

今日の世界ではグローバル化と呼ばれる、差異としてのネットワークの増殖の発端をつくる契機が発生しやすいような条件が地球規模で展開している。福島のいうハイパーサイクルは、現代社会に特徴的な社会経済システムの機能的分化によって、この差異の増殖が発生する領域が多角化しつつある状況を指している。

だがここで問題になるのは、ある特定のネットワークだけが増殖しつづけることである。いくつかの領域における異なる対立の出来事が、あたかも一つの差異をめぐる展開するように感じられる。あるいは当事者にとっては、ある特定の増殖したネットワークのみが他とは異なる重要性を持つように見える、ある種の「虚構」の過程である。この過程においてエスニック・アイデンティティは、単なる状況による自己規定の不確実性から、そうした個々の状況を超えた一種の錯覚を形成することになる。いわばネットワークの脱文脈化の過程である。ここで必要とされるのは、どのような状況下で、ネットワークが実体化されるのかを分析することである。個別の文脈ごとに、ネットワーク相互の関

係、およびシステムの領域との関連から考察することが重要となる。この実体化の過程は、比喩的には、水平的、垂直的分化の双方の力が作用する場において、諸力の拮抗関係の中から行われる。民族が実体化するこのネットワークの脱文脈化の過程において、フィッシャーの下位文化論との接合の外延があると考ええる。

(2) パーソナル・ネットワーク論の課題

これまで伝統社会とされた地域においても都市化や産業化が進むにつれて、これまで人々の行動を強く規制してきた基礎的な集団の拘束力が弱まり、諸個人の自由な選択とそこで表現される主体性が把握されるべき対象として浮上し、構造論的アプローチは後退していった。それに対して個人が単位となって様々な形態に形成された社会関係のあり様に着目するパーソナル・ネットワーク論は、多くの人類学者に衝撃を持って受けとめられた。なぜなら個人の主体性と社会構造を結ぶ新たな地平が現れるという期待があったからであった。しかし、その後のパーソナル・ネットワーク論の展開は、ネットワークが提供する何らかの便益に対する実践的な関心に焦点をあてたサポータティブ・ネットワーク研究が隆盛し、その構造的側面に還元しえない諸個人の側面を強調したがゆえに、かえって主体と構造的な文脈との接合を目指すという当初の傾向が後退してしまった。またパーソナル・ネットワーク論は、システムの領域との接合という課題も残したままである。すなわち都市社会を特徴づけている国家の法制度や行政による公共政策、マスコミによる情報操作、資本主義の市場メカニズムなどのソフトな管理と統合の動きへの関連づけをネットワーク論は怠ってきた。結果的に、社会構造から社会経済システムが自立化して、新たなかたちで個人を規制していく側面を見逃してきたといえる。

ここで今一度考えなければならないのは、差異を捉える枠組みとしてのパーソナル・ネットワーク論であり、それを個人とシステムを媒介する本来の位置において捉え直すことである。この場合の社会的ネットワーク論とは、個人を

主たる単位とする全体的ネットワークがマクロなシステムと対置するものである。全体的ネットワークは、密度の異なる様々な部分から構成され、いくつかの有意義なクラスター（下位文化）に分化している。そして、この社会層ともいべきクラスターごとに様々な形態でシステムと接続する構造をとっている。だがシステムの領域に対して個人はかつての大衆社会論が想起したように孤立して直接対置しているわけではない。この社会層は時として集団といえるだけの境界性を維持する場合もあるが、単なるカテゴリーにすぎない場合も多い。また階層というほどには序列化された秩序を前提としているわけでもない。これは、従来の社会理論の想定した社会経済システム、社会構造、個人のそれぞれの側面が分かちがたく結合し、強固な階層構造と集団構成が一体になったものではなく、このような意味での社会構造が解体し、システムと個人が見かけ上ではあるが自立化していく過程として捉えることができる。したがって、ここでのシステムとは、鈴木栄太郎のいう「機関と機関との関係」であり、個人を主たる単位としたパーソナル・ネットワークが意味あるクラスターとしての社会層に分化し、それが様々な程度に構造化する社会的世界との様々な接続関係、すなわち「機関が人に対する関係」や「人が機関に対する関係」をいかに維持しているかという点を考えることが重要である。

最後に、パーソナル・ネットワーク論とエスニシティ論との接合にあたって、課題となる次の3点を指摘したい。

第一に、パーソナル・ネットワークというミクロなレベルの分析を社会構造やシステムといったマクロなレベルの問題と関連づける論理や分析方法を見い出すことができない状況がある。フィッシャーの仮説にしても、友人ネットワーク、臨界量、下位文化形成、非通念性という4つの概念を結び付ける論理的構成は不十分であり、また実証レベルにおいても明らかにされていない。これは、パーソナル・ネットワークにかかわる個人データと社会構造が文化形成

にかかわる構造データとの接合という課題を残しているためである。このことは、パーソナル・ネットワーク研究が人と人との社会関係のみに焦点をあててきたことと内在的に結び付く問題点である。かつて、鈴木栄太郎が『都市社会学原理』の中で述べたように、結節機関の集積を都市とするなら、人と人だけでなく、人と機関のネットワークも分析の対象とすることが、マクロレベルに接合するための戦略として必要とされる。さらに民族の実体化とパーソナル・ネットワークとの関連も課題となろう。

第二に、同質性に基づく格差の拡大をともなう垂直的分化と異質性の増大をもたらす水平的分化とは、絶えずせめぎあう関係にある。垂直的分化とは、人々の社会的属性を構成する、量的変数として表されるもの。すなわち、学歴、収入、職業威信、年齢、居住年数などに基づく縦的分化である。量の大小が序列となり、格差の拡大を生み出す分化である。この分化は量的変数を内包するために、人々を同質なものとして扱わざるをえない。これに対して、水平的分化は、人々の社会的属性のうち質的変数として、つまり本来的にカテゴリカルなものとして表される横的分化である。たとえば、性、民族、人種、国籍、出身地、居住地、婚姻、職業などによる分化とされる。水平的分化は、異質なものの横的分化として、量的パラメーターをもたない。従来のパーソナル・ネットワーク論は、ネットワーク形成の制約性と選択性の問題として、単に都市度との関連で説明されてきた。だがこうした直交する二軸として成立する構造分化とその転回、すなわち、もともと異質な水平軸の諸属性が、ローカルな文脈において量的な変数に読み替えられ、格差をともない垂直軸へと吸収されてしまうこと。それと同じくして、とくにグローバル化という経験的世界において、民族、人種、国籍という属性群が、空間と文化における異質性の増大、つまり水平的なベクトルの強化をもたらすこと。この2つの次元の交錯として、パーソナル・ネットワーク論は、エスニシティ論の提起する異質性の課題

を孕みながら、グローバル・ローカル連関において、民族の実体化を説明する枠組みとして再構成されなければならない。

第三に、都市においては、エスニック集団や出身地域ごとの相互扶助組織が無数に組織される。従来このような組織は、伝統的な紐帯に限定した成員を特徴とし、単線的な近代化モデルに対する反証として議論されるとともに、都市における閉鎖的な社会関係として描かれてきた。だが、組織の内部を詳細に検討するとまったく異なった様相を呈する。表面的には伝統的な紐帯による閉鎖組織に見えても、内部には異質な出会いによって形成された人間関係が、宗教・儀礼を通じて仲間へと変換されたうえで、異質で多様な成員を多数抱えていることが指摘される(糸林 1997)⁹⁾。パーソナル・ネットワーク論にとって、様々な強者の同化の装置を突破した、こうした開放的で異質性を持った社会関係が実現されている基盤の解明も今後の課題となろう。

注

- 1) ポストモダン派の人類学者、クリフォードやマーカスの民族誌リアリズムへの批判は1980年代において人類学の「危機」として広まった。
- 2) この実体派と虚構派の対立については、両者を折衷する立場もあり、民族とは実体化されるようなメカニズムをもつ虚構であるとする立場(名和克郎 1992「民族論の発展のために」『民族学研究』57巻, 3号。), あるいは虚構としての民族が作られる素地には身体的な共属感覚があるという立場(井上紘一他 1991「民族学からみた民族」岡正雄他編『民族とは何か』山川出版社。)もある。
- 3) 第二次世界大戦以降の民族主義の台頭、エスニシティの政治化、そして国家としての独立を求める趨勢を背景に、いわゆるマイノリティ問題と政治主義化などの現象を解釈する枠組として提起された。
- 4) 内的植民地論では、近代化が進展しても文化的分業は残存する、あるいはかえって強化されるという前提で、垂直的なエスニシティ別階層構造を

示した。

- 5) 分割労働市場論では、雇用方針の変化によって文化的分業は弱化するとし、この時集団間の競合関係が生まれるが、労働市場におけるマジョリティの操作によって再び垂直的なエスニシティ別階層構造が生じるとした。
- 6) 中間マイノリティ論では、労働市場において自営業を営むことを選択したエスニック集団が、分割労働市場を利用して、その産物として隔てられたマジョリティとマイノリティを媒介する役目を担うことで逆に経済的適所を得ることを指摘した。
- 7) パーンズは、全体社会に張りめぐらされたネットワークを対象としたのに対して、ミッチェルは個人を中心として展開されるネットワークに関心を持った。この個人的社会関係を対象とする研究をやがてパーソナル・ネットワークという呼称が定着するようになった。
- 8) フィッシャーの方法は、「選択-制約アプローチ」(choice-constraint approach)と呼ばれる。これはネットワークが社会的制約のなかでなされる個人的選択の結果であること。また人口規模の増大が、個人の選択の余地を広げ、制約を減少させる点に着目して、諸制度を支えるのに十分な人口量である「臨界量(critical mass)」という概念を用いた(Fischer 1983 [1975]: 50-94)。
- 9) 筆者は、シンガポールのマレー系住民の下位分類とされるバウエアン同郷会(PBS)とエスニシティを事例に、単線的な同化モデルへの反証として、地域組織におけるマレーの同質化傾向とマレー・ムスリム連帯を指摘している。

参考文献

綾部恒雄

- 1993 『現代世界とエスニシティ』弘文堂。
- Barnes, J. A.
1954 "Class and Committees in Norwegian Island Parish," *Human Relation*, vol. 7. pp. 39-58.
- Blood, R. et al.
1956 A Social Profile of Detroit: 1955. in *A Report of the Detroit Area Study of the University of Michigan*, University of Michigan.

- Bonacich, Edna
 1973 "A Theory of Middleman Minorities," *American Sociological Review*, vol. 38.
 1974 "Advanced Capitalism and Black/White Relation", *American Sociological Review*, vol. 41.
- Bott, Elizabeth.
 1957 *Family and Social Network: Roles, Norms, and External Relationships in Ordinary Urban Families*, New York: Free Press.
- コーエン, A.
 1976 山川偉也他訳『二次的人間』法律文化社。
- Deng, Zhong and Philip Bonacich.
 1991 "Some Effects of Urbanism on Black Social Networks," *Social Networks*, 13(1), pp. 35-50.
- Fischer, Claude S.
 1972 "'Urbanism as a Way of Life': A Review and an Agenda," *Sociological Methods and Research*, vol. 1, pp. 187-242.
 1975 "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, vol. 80, pp. 1319-1341.「アーバニズムの下位文化理論に向けて」奥田道大他訳『都市の理論のために—現代都市社会学の再検討』多賀出版, 1983年。
 1982 *To Dwell Among Friends: Personal Networks in Town and City*, Chicago: The University of Chicago Press.
 Firth, R.
 1964 "The Family and Kinship in Industrial Society," *The Sociological Monograph Review*, vol. 8, pp. 65-87. 老川寛訳「産業社会における家族と親族」山根常男編『家族の社会学理論』誠信書房, 1971年。
- 福島真人
 1998 「差異の工学—民族構築学への素描」『東南アジア研究』, 35巻4号。
- Geerts, Clifford
 1963 *The Interpretation of Cultures: The Selected Essays*, Basic Books. 吉田禎吾他訳『文化の解釈学Ⅱ』岩波書店, 1987年。
- Gordon, Milton M.
 1964 *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, Oxford University Press.
- Greeley, Andrew M.
 1971 *Why Can't The Be Like Us?*, E. P. Dutton.
- Gulick, J.
 1989 *Humanity of the cities: an Introduction to Urban Societies*, Bergin & Garvey.
- Hannan, Michael T.
 1979 "The Dynamics of Ethnic Boundaries in Modern States," in Mayer, J. W. and Hannan, M. T. eds. *National Development and the World System: Educational, Economic, and Political Change, 1950-1970*, University of Chicago Press.
- Hechter, Michael
 1974 "The Political Economy of Ethnic Change," *American Journal of Sociology*, vol. 79.
 1978 "Group Formation and the Cultural Division of Labor", *American Journal of Sociology*, vol. 84.
- 姫岡勤他編著
 1971 『家族—その理論と実態』川島書店。
- 糸林誉史
 1997 「シンガポールのHDBエステートにおけるマレー・コミュニティと地域組織」『社会科学討究』, 43巻2号。
- Magbane, B.
 1971 A Critical Look at Indices Used in the Study of Social Change in Colonial Africa, *Current Anthropology*, 12(4).
- 松田素二
 1992 「民族再考—近代の人間分節の魔法」『インパクション』75号。
 1995 「人類学における個人, 自己, 人生」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社。
 1996 「都市と文化変容」『岩波講座 現代社会学 都市と都市化の社会学』第18巻, 岩波書店。
- Nielsen, Francois
 1980 "The Flemish Movement in Belgium after World War II: A Dynamic Analysis," *American Sociological Review*, vol. 45.

- 1985 "Toward a Theory of Ethnic Solidarity in Modern Societies," *American Sociological Review*, vol. 50, pp. 133-134.
- Oakley, A.
1974 *The Sociology of Housework*, London: Martin Robertson. 佐藤和枝他訳『家事の社会学』松籟社, 1980年。
- Okamura, Jonathan
1981 "Situational Ethnicity", *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 4.
- Olzak, Suzan
1982 "Ethnic Mobilization in Quebec," *Ethnic and Racial Studies*, vol. 5.
- Park, Robert Ezra and Ernest W. Burges.
1921 *Introduction to the Sociology*, University of Chicago Press.
- Park, Robert Ezra
1950 *Race and Culture*, The Free Press.
- Portes, Aljandro A.
1984 "The Rise of Ethnicity: Determinants of Ethnic Perceptions among Cuban Exiles in Miami, *American Sociological Review*, vol. 49.
- Wellman, Barry.
1988 "The Community Question Re-Evaluated," in Michael Peter Smith ed., *Power, Community and the City: Comparative Urban and Community Research*, New Brunswick: Transaction Books.
- 1990 "The Place of Kinfolk in Personal Community Networks," *Marriage and Family Review*, 15(1/2), pp. 195-228.
- Wirth, Louis
1938 "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 44(1), pp. 1-24. 高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバンイズム」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房, 1965年。